

On Peace

冥想



この靴下を見て
あなたは何を思いますか？



この靴下を履けるようになるまで
何人関わっていると思いますか？



El 2 de mayo de 1808 en Madrid by, Francisco de Goya

(事務局注: 「マドリード、1808年5月2日」 フランシスコ・デ・ゴヤ の紹介)

El 3 de mayo de 1808 en Madrid by, Francisco de Goya

(事務局注: 「マドリード、1808年5月3日」 フランシスコ・デ・ゴヤ の紹介)

Massacre in Korea (1951) by, Picasso

(事務局注: 「朝鮮の虐殺」(1951年) パブロ・ピカソ の紹介)

La Guerre (1952) by, Picasso

(事務局注: 「戦争」(1952年) パブロ・ピカソ の紹介)

La Paix (1952) by, Picasso

(事務局注: 「平和」(1952年) パブロ・ピカソ の紹介)

The Future by, Leonard Cohen

(事務局注：音楽「ザ・フューチャー」(レナード・コーエン)の紹介)



The Future (OST, Natural Born Killers) by, Leonard Cohen

(事務局注: 映画『ナチュラル・ボーン・キラーズ』のストーリーと
音楽「ザ・フューチャー」(レナード・コーエン)の紹介)



弱い虫

by 馬場俊英

(事務局注:上記音楽の紹介)

Imagine

by, John Lennon

(事務局注:「イマジン」(ジョン・レノン)の紹介)



War, No more Trouble in the World by, Bob Marley and the Wailers

(事務局注:「 War, No more Trouble in the World 」(ボブ・マーリー
&ザ・ウェイラーズ)の紹介)

平和の逆説

- 誰もが平和を願うが、世界は平和にならない。
- 一つの平和と複数の平和
- 理想の平和と現実の平和
- 総「平和」量不変の法則？
- 実践の問題？
- 平和の実践が戦争を起こす？
- 平和の不可能性？
- 三つの平和
 - Mission Impossible
 - Peace Imperative
 - Dilemma

平和(大辞林)

- 戦争や紛争がなく、世の中がおだやかな状態にあること、また、そのさま。
- 心配やもめごとがなく、おだやかなこと、また、そのさま。
- 戦争のない状態
- 暴力が除かれた状態
- 戦争、紛争、葛藤のない平穏な状態
- 戦争を止める過程(和平)

Peace(Merriam-Webster)

1: a state of tranquility or quiet: such as

- **a** : freedom from civil disturbance
- **b** : a state of security or order within a community provided for by law or custom

2: freedom from disquieting or oppressive thoughts or emotions

3: harmony in personal relations

- 4:**
- **a** : a state or period of mutual concord between governments
 - **b** : a pact or agreement to end hostilities between those who have been at war or in a state of enmity

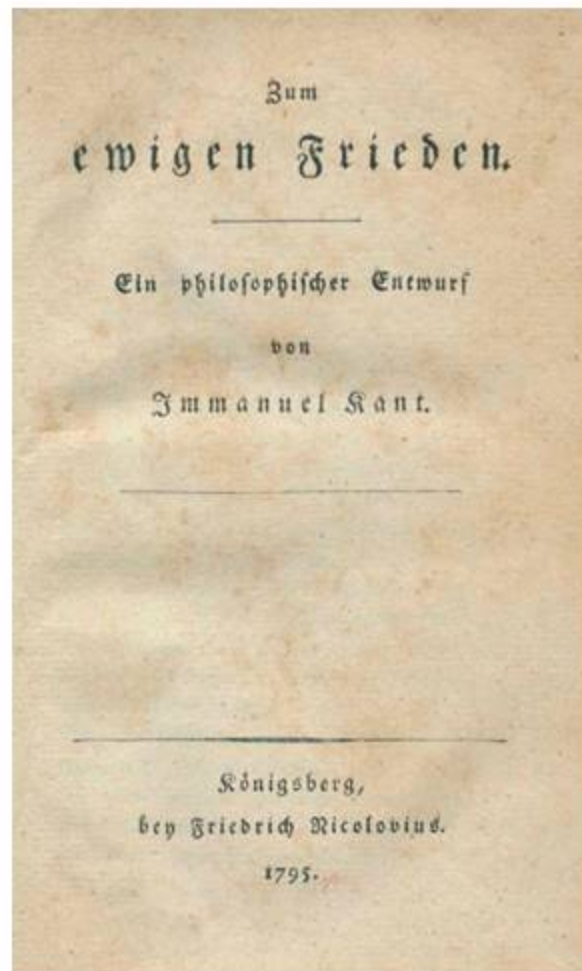
平和、平和、神様！

Pace, Pace, Mio Dio!

- キリスト教の平和
 - シャローム (shalom); 平安・大丈夫・安全・健康・安寧
 - エイレーネ (eirene); 終末論的救援・世俗的な安全保障
- モハメットの平和
 - イスラムの語源はaslama (服従する) であり、aslamaとは神への絶対服従を通じてsalam (平和) にいたること。
- 仏教の平和
 - 輪廻や執着からの解放・一心・和諍
- ヒンズー教の平和
 - 物質と精神の一致状態 (shanti-)・被害の排除 (ahimsa-)
- 道教の平和
 - 無為自然 (無為=あるがままにして作為しないこと、またそのさま。自然=人為によってではなく、自ずから存在しているもの。)
- 漢字の平和
 - 平等に禾が口に入ること=すべての人が生きること

Zum Ewigen Frieden

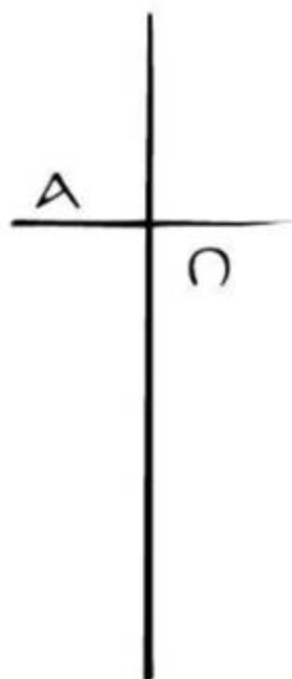
by, I. Kant



- 『永遠平和のために』1795年に初版、71歳の時の著作。
- 革命後のフランスとプロイセンの間に交わされたバーゼル平和条約への批判。
- サン・ピエールの『永遠平和論』の影響とその克服。
- 永遠平和実現のための具体的プランとその論証を意図。そのために政治と道徳の関係を論及。
- 「永遠平和のために」というこの風刺的な標題は、あのオランダ人の旅館業者が看板に記していた文字で、その上には墓地が描かれていたりした。
- ところでこの風刺的な標題が、人間一般にかかわりをもつのか、それともとくに、戦争に飽きようともしない国家元首たちにかかわるのか、それともたんに、そうした甘い夢を見ている哲学者たちだけにかかわるのか、といった問題は未決定のままにしておこう。

Zum Ewigen Frieden

*Einschlafen dürfen, wenn man das Leben
nicht mehr selbst gestalten kann,
ist der Weg zur Freiheit und zum ewigen Frieden.*



Frau - - - - -

geb. **Wittmann aus Perwolving**

* 7. Juli 1926

† 28. April 2015

Perwolving, Runding, Fludern, den 30. April 2015

In Liebe und Dankbarkeit:

....., Sohn
.....; Tochter mit Familie
.....; Tochter mit Familie
....., Sohn mit **Christa**
.....; Sohn
im Namen aller Verwandten

Der Trauergottesdienst mit anschließender Beerdigung findet am Samstag, den 2. Mai 2015, um 10.00 Uhr in der Pfarrkirche Runding statt.

Für bereits erwiesene und noch zuge dachte Anteilnahme im Voraus ein herzliches „Vergelt's Gott!“

Zum Ewigen Frieden

by, I. Kant



- 第1章

「第1条項、将来の戦争の種をひそかに保留指定締結された平和条約は、決して平和条約とみなされてはならない。」「なぜなら、その場合には、それは実はたんなる休戦であり、敵対行為の延期であって、平和ではないからである。」

「第2条項、独立しているいかなる国家(小国であろうと、大国であろうと、この場合問題ではない)も、継承、交換、買収、または贈与によって他の国家がこれを取得できるということがあってはならない」

「第3条項、常備軍は、時とともに全廃されなければならない。」

- 第2章

「平和状態は、なんら自然状態ではない。自然状態は、むしろ戦争状態である。(中略)それゆえ、平和状態は創設されなければならない。」

「各国家における市民的体制は、共和的でなければならない。」

「国際法は、自由な諸国家の連合制度に基礎を置くべきである。」

- 第一補説

「自然の機械的な過程からは、人間の不和を通じて、人間の意志に逆らってもその融和を回復させるといった合目的性がはっきりと現れでている」

Zum Ewigen Frieden

by, I. Kant



- 付録

「実地の法学である政治と、理論的な法学である道徳との間には、いかなる争いもありえない。」

「政治は、『蛇のように伶俐であれ』という。道徳は(それを制限する条件として)『そして鳩のように正直に』と付け加える」

「なるほど、正直は最良の政治であるという命題は、実践が(悲しいことに!)たびたびそれと矛盾するような理論を含んでいる。」「だが、正直はあらゆる政治にまさるという、同じように理論的な命題は、あらゆる反論をまったく寄せ付けないばかりか、実に政治にとって不可欠の条件をなしているのである。」

「たとえ限りなく前進しながら近づくしかないとしても、公法の状態を実現することが義務であり、実現の希望にも根拠があるとすると、(中略)真の永遠平和は、決して空虚な理念ではなくて、われわれに課せられた課題である」

Zum Ewigen Frieden

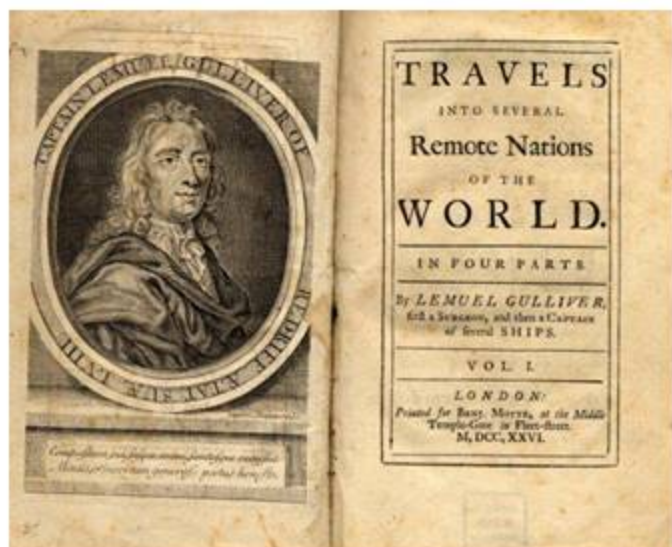
by, I. Kant



「恐るべき強大さ (potentia tremenda) にまで成長した近隣の強国が、不安の念を起こさせるとする。ところでこの強国は、他国を制圧できるから、実際にも制圧することを欲するであろうと想定できるであろうか。また、このことは弱国に対して、事前に侵害を受けていなくても、強国を(連合して)攻撃する権利を与えるであろうか。」

—自分の格率をここで肯定しながら告知しようとする国家は、この禍いをいっそう確実に、またいっそう急速に招くにすぎないであろう。

リリパット国とブレフスキュ国の戦争 『ガリバー旅行記』(スウィフト、1726)

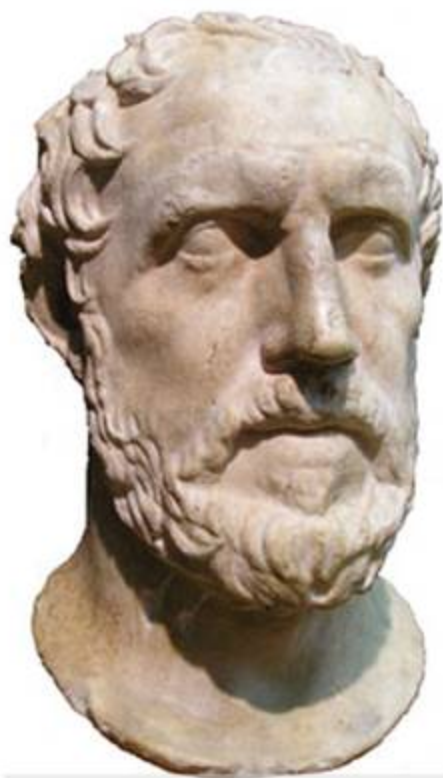


「戦いが起こったきっかけは、およそ次のようなことであった。卵を食べる時には、まずその大きな方の端を割ってから食べるというのが、昔からの習慣であることは、あまねく認められているところである。ところが現在の皇帝陛下の祖父にあたられる方が、まだ子供の時分に卵を食べようとして、昔ながらの習慣通りに割ろうとしたところ、うっかり一本の指を切ってしまわれた。そこでその方の

父であった当時の皇帝が勅命を発して、いやしくもわが臣民たるものは今後よろしく卵を割る時には小さな端の方を割るべし、これを背く者には重い処罰をもって臨む、云々という命令を下された。(これに反発する国民は反乱を起こし、これをブレフスキュの皇帝は支援した。)その結果、過去36ヶ月間両帝国の間に血みどろの戦闘が行われ、互いに勝敗を繰り返してきた。」

『ペロポネーソス戦争の歴史』

(トウキディデス、BC.460-BC.395?)



「この大戦は、アテーナイ人とペロポネーソス人が、エウボイア島攻略ののち両者のあいだに発効した和約を破棄したとき、始まった。(中略)アテーナイ人の勢力が拡大し、ラケダイモン人に恐怖を与えたので、やむなくラケダイモン人は開戦に踏み切ったのである。」

「(ラケダイモン人は)一たんゆだねられた覇権をうけとり、名誉心、恐怖心、利得心という何よりも強い動機のとりのなつた(のであり、)手にしたものを絶対に離すまいとしているにすぎない。」

“Violence, Peace, and Peace Research” (1969). by Johan Galtung



平和の消極的規定

暴力が排除された状態

平和の積極的規定

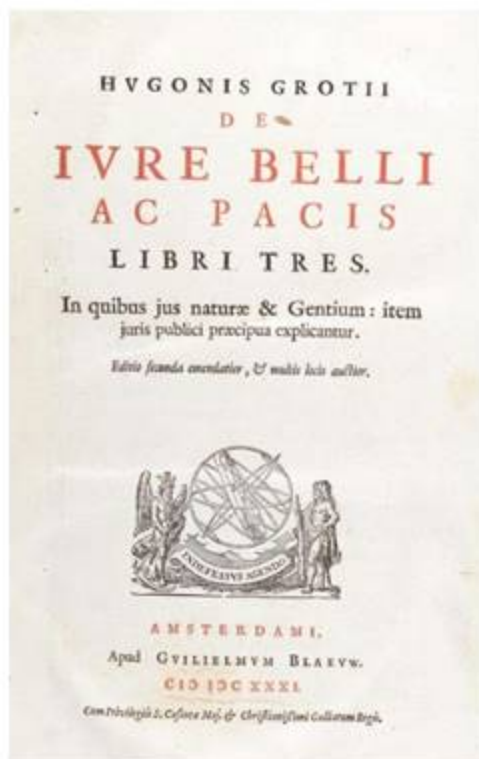
正義が実現された状態

戦争のような物理的暴力、抑圧的政治システムなどの構造的暴力、性差別や生態的差別など文化的暴力のない状態(消極的平和・積極的平和)

暴力を排除し、正義を実現するのはどのように可能？

- 平和回復(peace-making), war studies
- 平和維持(peace-keeping), security studies
- 平和構築(peace-building), peace studies

De jure belli ac pacis(戦争と平和の法) by Hugo Grotius



- グロティウス(1583-1645)
- 30年戦争の時代
- 国際法の父
- 『戦争と平和の法』(1631)
- 著述の目標



= 国家間の戦争を合理的なルールで規制すること

- 戦争を抑止するために必要なこと
- = 戦争の目的と手段に対する思慮 (prudence)

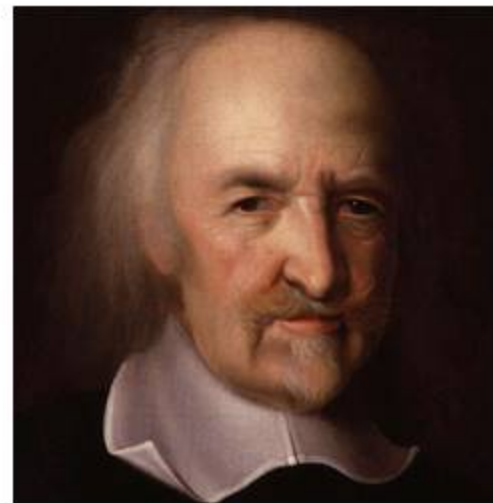
Leviathan(1651) by Thomas Hobbs



レヴァイアサンとは、聖書
に出る怪物

人間が社会契約によって
形成した国家を象徴。

個人間に行使してきた暴
力を国家が独占



人間の自然状態は幸福(felicity)の追求であり、
幸福は欲求の持続的過程であるため、世界は成
功を追求する力の競争状態が常態である。力の
平等は恐怖の平等であり、この恐怖の相互性が
戦争を不可避にする。人間の自然状態は、暴力
と欺瞞の乱舞する万人の万人に対する戦争状態
になる。

Il Principe(1532) by Nicolo Machiavelli



君主は、愛されるより恐れられるほうがはるかに安全である。

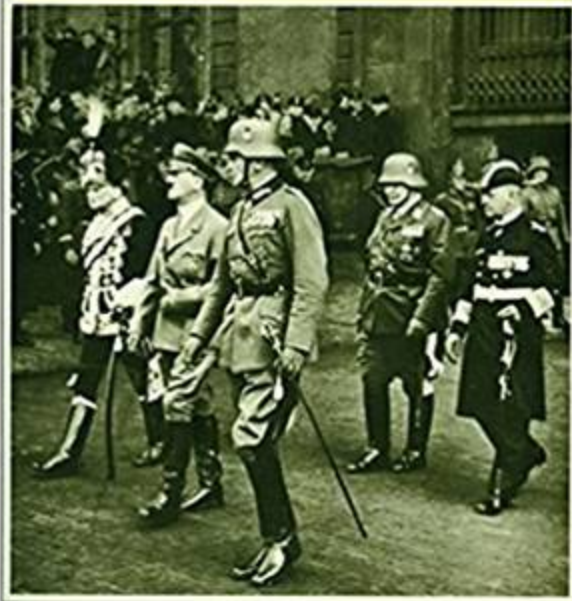
The Twenty Years' Crisis, 1919-1939

by, E.H.Carr (1939)

THE TWENTY YEARS' CRISIS, 1919-1939

by Edward Hallett Carr

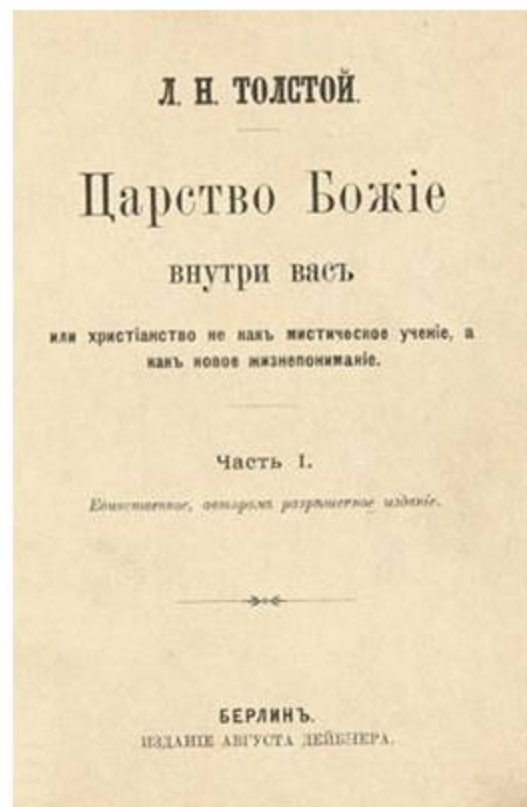
An Introduction to the Study
of International Relations



- 「未成年の思考は、どうしても目的に向かって走りがちとなり、いきおい際立ってユートピア的となる。とはいえ、目的を全くしりぞける思考は、老齡の思考である。成年の思考は、目的を観察および分析と化合させる。こう考えるとユートピアとリアリティとは、政治学のもつ二つの様相である。」
- ユートピアとリアリティとの対立、「それは、世界が自分たちの政策に順応するようになると考える人びとと、自分たちの政策を世界の現実に適応するように立てようとする人びととの間の終わることのない論争である。」(アルベール・ソレル)
- それは「自由意志」と「決定論」の対立であるが、ユートピアンに特有の欠点はその主張の一本調子なところであり、リアリストに固有の欠陥はその思考が何も生まないことである。

Царство божие внутри вас Л.Толстой (1894)

- 『神の国は汝らのうちにあり』(1894)
- トルストイは国家を拒否
- 国家が依拠する「暴力の法則」が、キリスト教が実践すべき「愛の法則」の実現を不可能にする。
- テロも暴力に訴えるという点で国家同様に不道徳である。
- 生活をすべてかけて政府と戦う。
- 公職、納税、公権力、兵役を拒否。
- 許された抵抗は、「何かをする」ではなく、「何かをしない」こと。
- 老子の『道德経』の影響
- 人の不幸は、「すべきことをしなかったから」ではなく、「すべきでないことをしたから」による。
- 「兵役拒否」と「脱走」の思想へ
- 日露戦争への厳しい批判、反対。
- ガンディー、徳富蘇峰、与謝野晶子、崔南善、李光洙



脱走兵の歌(大統領閣下)

沢田研二

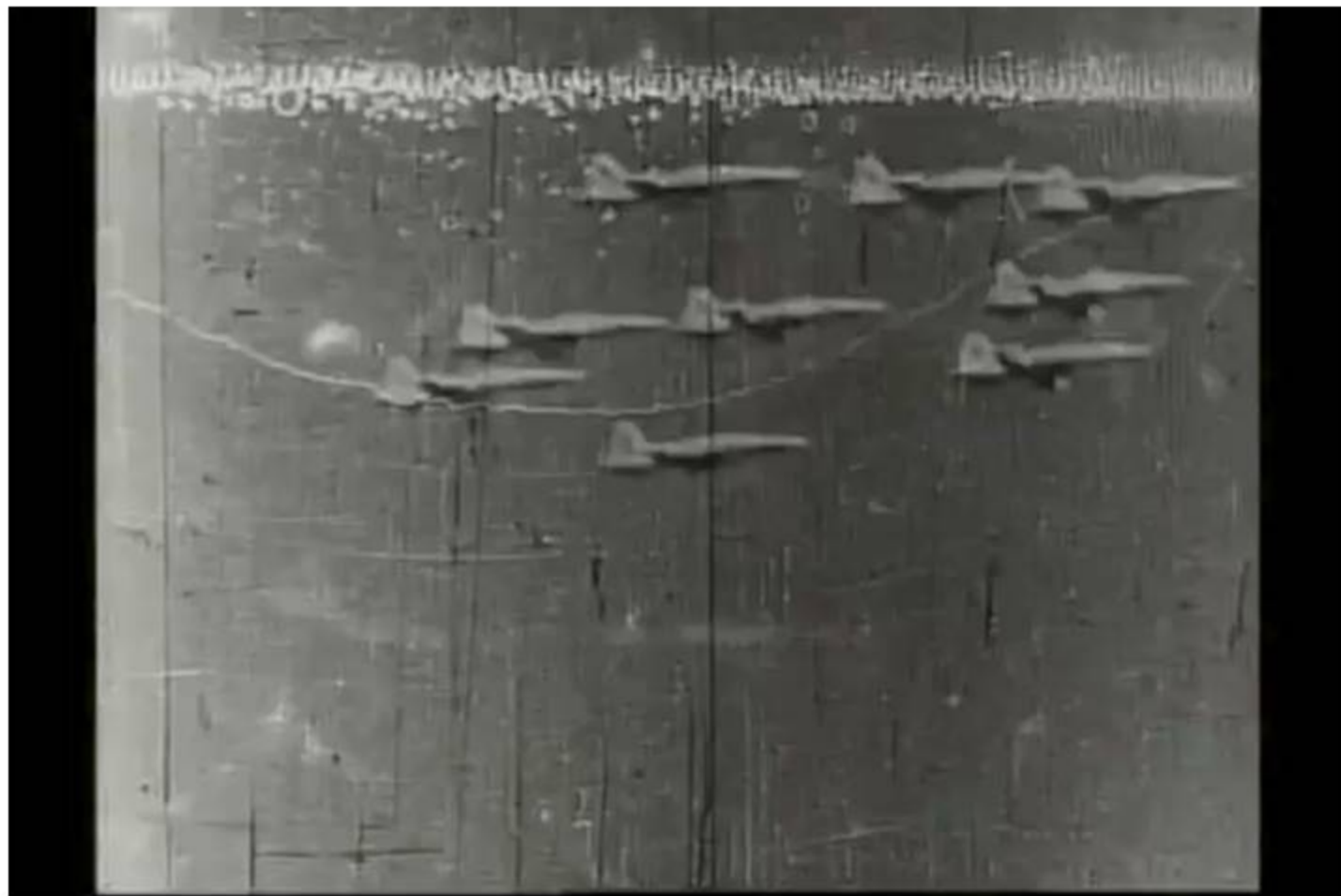
(事務局注:上記音楽の紹介)



ベ平連という平和運動

- 北爆を契機にしたベ平連誕生(1965. 4.)
 - 「ベ平連=ベトナムに平和を！市民連合」
 - 1969年に最高潮に達し、1974年1月に解散。
- 「ベトナムに平和を！」、「ベトナムはベトナム人の手に！」
「日本は戦争に加担するな！」
- 米国の反戦運動・黒人解放運動の影響
 - 国境と人種を超えた運動、市民的不服従の原理の受容
- 独特の新鮮な組織原理、行動原理
 - 組織ではなく運動、「個人原理」に立った運動
- 市民的不服従の貫徹
 - 脱走の勧め
- 「現物」として現れた脱走兵
 - 新しい運動、新しい思想の模索

ベ平連という平和運動



ベ平連集会(1969年10月10日)



ベトナム「反戦脱走兵」の誕生

- 「イントレピッド4」の出現
 - 1967年10月、空母イントレピッド号から脱走した4人の水兵
 - ベ平連の援助を受け、モスクワ経由でスウェーデンに入国
 - 四人の記録映画とベ平連の記者会見=>「反戦脱走兵」の誕生



日高六郎, 鶴見俊輔, 開高健, 小田実



脱走兵たち



脱走兵たち



脱走兵たち



JATECの誕生と 「反戦脱走兵」支援運動

- ジャテックの誕生（1968年3月）
 - Japan Technical Committee for Assistance to US Anti-War Deserters
 - 相次ぐ脱走兵の隠匿と国外脱出を支援
 - ベ平連とは別途の脱走兵支援運動を担当した専門グループ
- 1968年4月、6名の脱走兵を根室ルートで脱走させる
- 1968年5月から9月まで、7名の脱走を支援
- 計17名が国外脱出、16名がスウェーデンに到着
- 日本人脱走兵の誕生（清水徹雄）
- 「スパイ・ジョンソン」事件の影響と方針転換
- 偽造パスポートを利用した民間航空便での脱出（2名）
- 脱走兵のその後

「脱走兵」の思想、「脱走」の思想 : 個人の原理、国家の論理

- 脱走兵という存在は、「人間がいかなる原理に立脚するとき戦争を全面的に拒否できるか(=普遍原理)」の問題を提起
- 個人原理の国家原理に対する優位
- 他者化した戦争を内面化し、「私の戦争」として意識すること
- 鶴見良行、「国民としての断念」
- 鶴見俊輔、「自分自身の内部の国家を消してゆく作業」
- 国家という存在を相対化、個人の自立と自覚に基づいた運動=>国境を越え、市民的不服従の国際連帯に発展
- 信念に満ちた「強い個人」を想定

「脱走兵」の思想、「脱走」の思想 :「弱い個人」

- 現実の脱走兵は「生ものの存在」
- 欲望を抑えきれない「弱い個人」の発見
- むしろ思想の幅が広がる
- 「日本の中に普通の生活をする事ができる条件を作ること」を運動の目標に設定=>一種の解放区を作ること
- 国民国家体制の中に空隙を創出するという目標設定
- 「弱い個人」対「弱い個人」
- 肯定的人間でもなく革命的人間でもない、欠けた存在として人間が思想の中心になる

生活世界の反戦運動

- ベトナム脱走兵支援運動は国民国家の一角を崩した運動
- 「国民」という資格なしには世界のどこにも存在できない、20世紀の国民国家の空間に、「国家によって管理できない空間＝空隙」を作ること
- 脱走兵を支援した日本人は、脱走兵と連帯することで、国家のイデオロギーと国家のアイデンティティから脱走を試みる
- ベトナム戦争との物理的距離が「思想の空間」を創出
- 日本人はこの「思想の空間」で「脱走」の問題を生活世界の問題として受け入れる
- 脱走兵を隠匿、脱出させた日本人は脱走(desertion)という行動に連帯し、日本のナショナル・アイデンティティからの集団的脱退を遂行

ソウル・明洞、1971年5月17日

(京郷新聞、1971.5.18.)

美軍30여명, 서울서反戰데모



전쟁을 원치 않는다는 뜻이라는 검은 완장을 두르고 연좌시위하는 미군인들. 【17일하오서울明洞입구에서】

17일하오 8시 10분 서울중구 명동 1가 42 국립극장앞네거리에서 사복차림의 미8군소속「어네스트·허스트」일병(22) 등 미군 30여명이 팔에 검은 띠를 두르고 월남참전을 반대하며 침묵시위를 벌였다.

연행됐다가 모두 미 8군단국에 이첩됐다. 이에 앞서 이들은 이날하오 5시 15분쯤 서울중구 명동 1가 코스모스백화점앞에서「인도차이니」전송전을 호소하는 전단을 갖고 朝鮮호텔앞까지 행진, 약 10분간 이 호텔앞에서 연좌데모를 벌이다가 경찰의 해산명령을 받고 다시 명동입대를 불

편서 약 3시간동안 침묵시위를 벌였다. 이날 미군들의 월남전반대에 모에 가담한 權英玉양(20·서울충무구충신동 18의 2) 등 한국인 4명은 남대문서에 연행됐다가 이날밤후 방했다.

世界を救う愛とは？

君子和而不同、小人同而不和

無逸

「また逢う日まで」に合わせた ダンス・シーン、『メゾン・ド・ヒミコ』より

上記映画ワンシーンの紹介



What a Wonderful World by Playing for Change

(事務局注: 「この素晴らしき世界」の紹介)

Thank you for your listening!